

細谷式

地頭力

思考停止はもう卒業。

トレーニング

ホンモノの「考える力」を手に入れる！

Vol.1

思考回路 起動編

細谷式

地頭力

思考停止はもう卒業。

トレーニング

ホンモノの「考える力」を手に入れる！

Vol.1

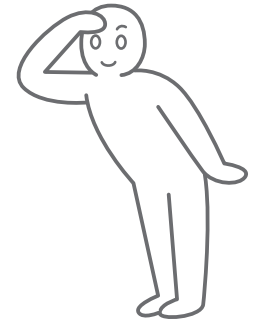
思考回路 起動編

IEC

学習の進め方

① 学習のスケジュールを立てる

テキストの学習を始める前に、講座全体の学習スケジュールを考え、決めておきましょう。また、本講座では紙とペンを用意して取り組んでもらうような演習がいくつかあります。専用のノートを1冊用意すると、演習に気分良く取り組めるかもしれません。



② 学習を進める

無理のないペースで学習を進めていきます。本文を読み、重要だと思った箇所には下線を引くなどしましょう。テキストには、学習内容についてまず考えるための「**演習問題**」と、学習したことの理解度を深めるための「**やってみよう!**」がありますので、それぞれ取り組んでみましょう。また、「やってみよう!」の中の一部の問題が提出課題として出題されます。提出課題をよく確認しましょう。

問題の種類

◆ 「演習問題」

その項目で学ぶ内容の導入問題として取り組んでもらいます。演習問題の後は解説が続きますが、大切なのは答えそのものではなく「考えるプロセス」です。あまり身構えず、自分で考えられる範囲で答えてみましょう。

◆ 「やってみよう!」

学んだことを踏まえて取り組みます。設問に対する解説はないので、それまでに学んだ考え方を参考に、自分なりの答えを出してみましょう。



③ 課題を提出する

各単元のテキスト学習が終了したら、課題に取り組みます。まずはじめは、テキストを見ずに取り組んでみましょう。わからない部分については、テキストを読み返しながら、解答を記入します。全ての設問に解答し終わったら、期日までに提出してください。

はじめに

本講座のテーマである「地頭力」とは、ひと言で表現すれば

「仕事に必要な考える力」

とすることができます。では、なぜそのような能力を身につける必要があるのでしょうか？

実際に

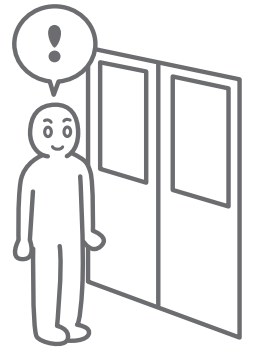
「もっとよく考えろ」

「少しは自分の頭を使ったら？」

「うちの若手社員は言われたことしかできない」

といった言葉は、職場で最もよく聞かれる言葉の一つでしょう。

これらは基本的に、日常生活で「考える」という行為を怠っていることから生じています。まずはこの「考える」ことの意味をお話ししましょう。



地下鉄のホームで電車を待っている人には、大きく二つのタイプの人があります。

- ・何も考えずに無意識に「ぼーっと」並んで待っている人
- ・常に「降りた後」のことを考えて、乗り換えや下車に最も有利な場所を意識して電車を待っている人

の二通りです。どちらが「仕事ができる人」か、明白でしょう。

「それはそうかもしれないけど、それで一体どれだけの差がつくの？」「そんなふうにあくせく生きなくたっていいじゃない？」という声もあるかもしれません。

確かに地下鉄乗車の場合だけで考えれば、「たった1回や2回の乗り換え」でつく差は目的地に着くのがせいぜい「5分か10分違うだけ」かもしれませんが、実際の仕事では、毎日「無数の乗り換え」が起こっています。ですから、数年もすれば、それは決定的な差となるのです。

しかもこれは「観光地で乗る鈍行列車」ではなく、「地下鉄」という、効率的にふるまうことが期待されている場面においてのことです。常にこのような考え方でいることが楽しいかどうかはわかりませんが、少なくともこの地下鉄の例において望まれることは明白でしょう。しかも地下鉄の「待ち時間」にすることといえば、スマホで時間をつぶす他は「ぼーっと待っている」以外には特にはないはずで、「一歩先手を打って乗り場を移動しておく」ことで失うものは、ほとんどありません。

これが、「考えている人」と「考えていない人」の差のわかりやすい一例です。

「地下鉄の例」では「一歩先を考えているかどうか？」という差でしたが、先ほどお話しした通り、仕事の中ではこのような場面が多数起っているにも関わらず、そのほとんどが「見えていない」人の方が多いのです。「見えている」人からするとその様子が歯がゆくてたまらないため、冒頭に挙げた「もっと頭を使え」というような言葉が出てくるのです。

このように、頭を使って考えていない状態のことを、「思考停止」といいます。この思考停止は様々な場面で見られる症状なのですが、最大の問題は、その思考停止している本人がその状況に気づいていないことです（つまり「頭を使え」と言われている、その意味がわからないから手の打ちようがないということです）。

このように「頭を使っていない人」というのは、周囲の期待に答えていないばかりか、むしろ仕事の妨げになっていることもあるのに、そのことに気づいていないことがあまりに多いのです。

また、「考える」ことで、仕事上でも日常生活でも、他の人と違う個性が出せるようになっていきます。

このように書くと、「他の人と同じで何が悪い？」という声が聞こえてきそうです。

例えば、みなさんがお客の立場でお店に行った時に、良い印象を受けた店員さんのことを思い出してみてください。その人たちに共通していることは、「他の人が当たり前のようにやっている以上のことをやってくれた」人たちではないでしょうか？

スポーツ選手でも同様です。結果を残していて人気があり、高額な報酬を得ている人というのは、「その人にしかできない」プレイができる人であるはずですが。

さらに切実な問題として、そのように「誰がやっても同じ（結果が変わらない）」で「マニュアル化が可能」な仕事は、急速に自動化されたり、ロボットに置き換えられたりしていきます。対人的な仕事についても、自動改札や高速道路のETC化、あるいは空港のチェックイン等も急速に機械に置き換えられています。そして次に来るのはオフィスワークです。「言われたことだけ忠実にやる」のであれば、疲れを知らずミスがないコンピュータやロボットがやったほうが、何倍も何十倍も、効率が良いのです。

いまのところ、まだ「自分の頭で考えて創造的な結果を出す」ことについては、圧倒的に人間の方が上回っています。

一方で、今後様々なテクノロジーの進化によって、「考えていない」人の仕事は急速になくなっていくことでしょう。本講座で「考える力」を重要視するには、そのような背景があります。

このように重要な「考える力」ですが、この「考える力」というのは目に見えません。したがって、例えば英語の単語を覚えるとか、簿記のルールを勉強するといった知識の習得に比べると、はるかにつかみどころがないのです。それを「目に見える」ようにすることで、誰にでもそのやり方を再現できるようにするのが本講座の目標です。

それによって仕事に向かう視点を変え、仕事の質を向上させることを目的とします。また、お客様や自社内の仕事の依頼主の満足度を上げるとともに、自らも楽しく仕事ができるようになれば、必然的に会社の利益も上がっていくことになるでしょう。

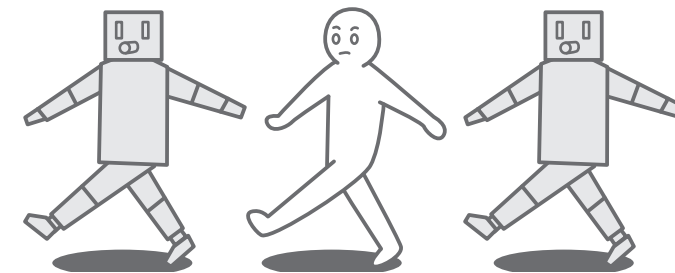
まずVol.1では、「思考停止とは？」という職場での状況を再現することで、「いかに普段の仕事の中で頭を使っているか？」をチェックして、考えることの重要性を再確認することからスタートします。

続いて、思考回路を起動するための第一歩として、考えるための基本中の基本でありながら誰もが実践しきれていない「なぜ？」という疑問詞の活用方法について学んでいきます。

そして最後に、考えることのメリットを理解したうえで、実際に思考回路を起動し続けるためのヒントをお話ししていきます。

続くVol.2、Vol.3では、起動した思考回路をさらに活用するために、仮説思考やフレームワーク思考といった思考法を紹介して、その実践の方法を演習問題を通じて習得していきます。

本講座で、みなさんが「思考停止」の状態を認識するとともに、そこから抜け出し、さらに明るい将来を描いていかれることを祈っています。



はじめに 5

CHAPTER 1 「考える力」を高めるために知っておきたいこと

全ては「無知の知」から始まる 12
 ○やってみよう！ ① 16

CHAPTER 2 あなたはどこまで「自分の頭で考えている」か？

「自ら考えている度」チェック 18

CHECK 01 わからなければすぐにネットで調べる 19
 ○やってみよう！ ② 23

CHECK 02 なんでも上司やお客様に言われた通りにやる 24
 ○やってみよう！ ③ 26

CHECK 03 他部門からの依頼はそのまま別の部署や関係会社に振る 27
 ○やってみよう！ ④ 28

CHECK 04 十分に情報が集まらないと先に進めない 29
 ○やってみよう！ ⑤ 31

CHECK 05 自分の業務や業界は特殊だと思っている 32
 ○やってみよう！ ⑥ 35

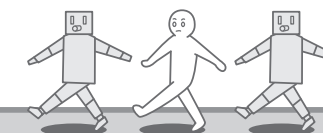
CHECK 06 よく他人に「アドバイス」を求める 36
 ○やってみよう！ ⑦ 38

CHECK 07 具体的に例を示されないと動けない 39
 ○やってみよう！ ⑧ 41

CHECK 08 「例えば……」と言われたことをそのままやる 42
 ○やってみよう！ ⑨ 44

CHECK 09 「横並び」や「実績」を優先させて考える 45
 ○やってみよう！ ⑩ 48

CHECK 10 協調性があるほうである 49
 ○やってみよう！ ⑪ 50



CHAPTER 3 思考停止から脱するための「なぜ？」

「上位目的」の存在を知ろう 52
 ○演習問題① 52

「なぜ？」で仕事を変える場面の実践演習 58

THEME 01 「この前の飲み会、時間が短かったですね」 59

THEME 02 「提案書の文字を大きくしてください」 63

THEME 03 「××の経費を部門別にまとめてください」 67
 ○やってみよう！ ⑫ 69
 ○やってみよう！ ⑬ 70
 ○やってみよう！ ⑭ 71

CHAPTER 4 「考える」ことのメリット

「考える」ことによるメリットを実感しよう！ 74

MERIT 01 仕事を減らせる 75
 ○やってみよう！ ⑮ 76

MERIT 02 依頼者の満足度を上げられる 77
 ○やってみよう！ ⑯ 79

MERIT 03 仕事の自由度が上がる 80
 ○演習問題 ② 82

MERIT 04 より大きな仕事ができるようになる 85

MERIT 05 (何よりも) 仕事楽しくなる 85

CHAPTER 5 思考回路を起動するためのヒント

思考回路はこうして使いこなす 88

CHAPTER 1



「考える力」を高めるために 知っておきたいこと

「考える力」について学ぶ前に、まず、知っておきたいこととして、「無知の知」というものがあります。このことを頭に入れておくことで、後の学習がよりスムーズに進んでいきます。いまの自分の状況・状態を省みながら、読んでみてください。

〈著者紹介〉

細谷 功 (ほそや いさお)

ビジネスコンサルタント・著述家

株式会社 クニエ コンサルティングフェロー

1964年 神奈川県生まれ

株式会社東芝を経て、アーンスト & ヤング、キャップジェミニ等の米仏日系コンサルティング会社にてコンサルティングに従事。コンサルティングの専門領域は、製品開発や営業等の戦略策定や業務/組織/IT改革。

近年は問題解決や思考力に関する講演やセミナーを企業や各種団体、大学等に対して国内外で実施している。

主な著書に『地頭力を鍛える』(東洋経済新報社)、『やわらかい頭の作り方』(筑摩書房)、『ロジカルシンキングを鍛える』(KADOKAWA)等がある。

全ては「無知の知」から始まる

「自分はわかっていない」と知ることから

スポーツや趣味の世界で上手な人というのはどういう人でしょうか？ あるいはどういう人が上達が早い人でしょうか？ もちろん素質の占める部分は大きいでしょうが、ここではももとのレベルの高さではなく、「成長のスピード」に着目してみましょう。

当然、「練習時間が長い」とか「良質な練習をしている」とか「常にそのことばかり考えている」というのが、早く成長するための重要な条件になると思います。では、なぜそのような人たちはそうした努力を継続できるのでしょうか？

「好きである」ということももちろんあるでしょうが、その他に、「目指しているレベルが高い」ことが挙げられるでしょう。さらに「目指すレベルの高さ」は、裏を返せば「いかにいま自分ができていないかの認識の大きさ」と言うことができるのではないのでしょうか。

つまり、このギャップが自らの現状への「危機感」となり、成長のための「気づき」ということになります。

あらゆる学習や自己の成長にとっての最初のステップは、「気づき」です。この言葉はよく使われるものではありませんが、「気づき」の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはありません。

自ら成長したり新しいことを習得したりする時、「自分にはわかっていないことがたくさんある」と認識することから全てが始まります。「自ら学ぶことはない」と思った瞬間に成長は止まり、他人からのアドバイスも本に書いてあることも、一切は目にも耳にも入らなくなってしまいます。

逆説的な言い方になりますが、「論理的に考えられる人」というのは、「いかに自分の説明や文章が論理的でなくてわかりにく

いか」を誰よりも自覚している人と言えます。「自分がどう論理的でないか」がわかった瞬間に、もはや勝負がついてしまうのです。逆に「どこが論理的でないかわからない」人は、いくら他者から指摘されても「そんなはずはない」と成長を自ら止めてしまいます。

「無知の知」の考え方

「哲学の父」と言われた古代ギリシャの哲学者ソクラテスが唱えた概念に、「無知の知」というものがあります。これは要するに、「自分がいかに無知であるかを自覚する」ということです。彼が活躍した紀元前のギリシャにおいて、当時「最高の知恵者」であるとされたソクラテスは、自ら「そんなはずはない」と思っていました。そこで当時の他の様々な知恵者を訪れて会話をした結果、最終的にたどり着いた答えは、

自分は「自分がいかにわかっていないかを自覚している唯一の人間だった」ということでした。

これが「無知の知」の考え方です。

他の「知恵者」たちは、そのような「知的な謙虚さ」がなく「自分は他者よりもよく知っているのだ」という認識の者がほとんどだったのです。

このことは、私たちが知的に成長するために必要なことを教えてくれます。

「無知の知」、つまりいかに自分がわかっていないかを自覚することによって、「考えることが重要だ」と認識することに至り、思考回路が起動されるわけです。ここではそのような「無知」について、いくつか留意すべきポイントをお話しておきます。

一つ目は、「知らない」と知っている」と「知らないことすら気づいていないこと」との違いです。たまに「根拠のない自信」に満ちた人がいます。たとえこのような人でも、さすがに自分が全てのことを知っているとは思っていないでしょう。ところが、そういう人たちも含めて意外に気づいていないのは、

自分には「気づいていないことすら気づいていないこと」が無限に存在しているということなのです。

POINT!

▶自分は論理的に考えていると思う？

自分の説明が理解されないのは、相手が論理的に考えられていないからだと思っていませんか？

論理的に考えられる人というのは、自分の説明や文章がいかに論理的でなくてわかりづらいかを自覚しているものです。

POINT!

▶ギャップがやる気に！

「目指すレベル」と「いまいる自分のレベル」のギャップが「やる気」になってきます。したがって、「いかに自分ができていないか」を知ることは、自らの成長にとって最も重要なことになるのです。



このことを考慮に入ると、何かの領域に関する理解度について、仕事でも勉強の世界でも、3種類の人がいることになります(下記図1参照)。まず、大きくその領域のことを「わかっている人」と「わかっている人」というのが単純な二つの分類になります。さらに「わかっている人」も、前述のことを考慮すると二つに分けられます。

POINT!

▶境界線を越えよう!

「わかっていることすらわからない人」と「わかっていることすらわかっている人」の間の境界線を越えることを目指そう。

それは、「わかっていることすらわかっている人」と「わかっていることすらわかっている人」です。それはすなわち、「無知の知」と「無知の無知」との違いということができます。学習をするうえでは、「現時点でわかっているかどうか」よりも、「わかっていることを自覚しているかどうか」の方がはるかに重要です。つまり図1でいうところの点線の差が非常に重要なのです。したがって、本巻の最大の目標は、読者のみなさんにこの点線を超えて、「無知の知」の領域に入ってもらうことにあります。

あなたは「無知の無知」ではないか?

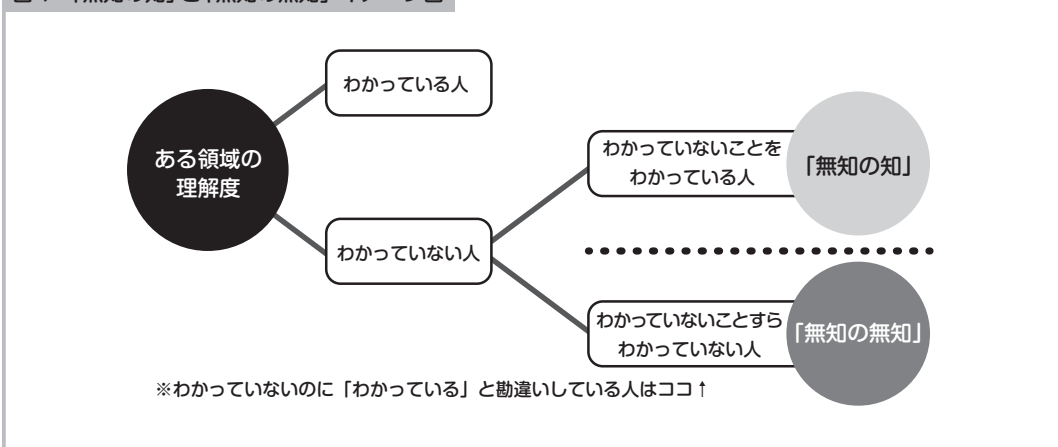
では、この違いは日常的にどのような場面で出てくるのでしょうか。ここでは「無知の知」の人と「無知の無知」の人の比較という形で表現してみましょう。

- 「無知の無知」の人は自分に理解できないことがあると、相手を「わからず屋である」といきなり否定し、反論し始めるが、「無知の知」の人はまず、
「自分が理解できていないのではないか」と自覚し、「質問」を始める。
- 「無知の無知」の人は他者からの批判を受けるとまずは自己弁護に走って「言い訳」や「自分の正当化」を始めるが、「無知の知」の人は、
すぐに自分の非を認められる(すぐに謝ることができる)。
(「無知の無知」の人には「自分が間違っている」という発想が、そもそもない)
- 「無知の無知」の人は相手を変えようとするが、
「無知の知」の人は自分を変えようとする。
(「無知の無知」の人は全て自分が正しいという前提で話を進めるが、「無知の知」の人は自分が間違っているかもしれないと思うため)
- 「無知の無知」の人は、新しい事象をまず否定するが、
「無知の知」の人はまずそれを理解しようとする。
(「無知の無知」の人は、それまでの自分の知識や経験が全てなので、新しいものを受け入れる姿勢がない)

いかがでしょうか。あなたは前者の「無知の無知」の領域の思考に陥ってしまうことはないでしょうか。最近の自分の言動をいくつか思い出してみてください。それが、本講座のスタート地点となります。



図1: 「無知の知」と「無知の無知」イメージ図





やってみよう! ①

- ① 最近、自分の身の回りで、「そんなことはわかっているよ」と、実はわかっているのに言っている人、場面に会わなかったでしょうか。考えてみましょう。

解答欄

- ② 上記①だけで終わってしまったら、まさに「無知の無知」の状態です。①で考えたことを自分が本当にやっていないか、我が身に照らし合わせて考えてみましょう（特に、自分が得意とする分野において振り返って考えることが重要です）。

解答欄

CHAPTER 2



あなたはどこまで 「自分の頭で考えている」か？

CHAPTER 1 では、「無知の知」とはどのようなものなのかを学びました。ここでは、その「無知の知」にどうやって気づき、どうやってそこから抜け出すのかを学んでいきます。

「自ら考えている度」チェック

それでは、CHAPTER 1の内容を頭に入れたうえで、まずは普段どこまで自ら考えて行動しているのか、チェックしてみましょう。

以下の項目で自分に当てはまるものにチェックを入れてください。これはテストではなく、その後の学習を効果的に進めるためのものです。普段の自分の言動や考え方と照らし合わせて、素直に考えてみてください。

10のチェック項目

- 1 わからなければすぐにネットで調べる
- 2 なんでも上司やお客様に言われた通りにやる
- 3 他部門からの依頼はそのまま別の部署や関係会社に振る
- 4 十分に情報が集まらなると先に進めない
- 5 自分の業務や業界は特殊だと思っている
- 6 よく他人に「アドバイス」を求める
- 7 具体的に例を示されないと動けない
- 8 「例えば……」と言われたことをそのままやる
- 9 「横並び」や「実績」を優先させて考える
- 10 協調性があるほうである

いかがでしたか？

おそらくどんな人でも、二つや三つは確実に当てはまるのではないかと思います。気づいた人も多いかと思いますが、これらの項目は、全て「思考停止」状態を象徴するものです。中には「どうして？ 何がよくないの？」と思われる項目もあるかと思いますが、ここからは、「なぜ」このような行動が「考えていない」ことになるのか、何がよくないのかを解説していきます。



CHECK 01 わからなければすぐにネットで調べる

調べた情報を自分の考えで整理する

みなさんは職場でわからないことが出てきたらどうするでしょうか？

おそらく「まずはネットで検索してみる」という答えが一番多いことでしょう。もちろん、わからないまま放置しておくよりは、「すぐに調べる」という姿勢ははるかに望ましいことです。

ところが問題はその後です。仕事が「ネットで検索してまとめること」になってしまっていないでしょうか？ ネットで調べてわかることをまとめるだけであれば、それはいまの時代、小中学生だってできることです。さらに言えば、そのような仕事はいずれコンピュータによって自動化されるようになっていき、機械に置き換えられていくことになるでしょう。

つまり重要なのは、調べることそのものではなく、調べて出てきた結果をいかに結びつけ、そこからなんらかの意味合いを導き出すことです。

ネットで調べて検索結果として出てきた情報を自分なりの考えを持って結びつけて、もともとの調査の目的にしたがってなんらかの結論を出すことが、「考える」ということなのです。

良い仕事をするための3条件

ここであらためて、仕事に必要な知的能力とはどんなものなのかを考えてみます。

ここでは料理に例えてみましょう。

おいしい料理が提供されるために必要な条件はなんでしょうか？ 大きく三つに分かれるのではないかと思います。

一つ目は「食材」です。寿司や刺身のような生の魚介類等、特に新鮮さが要求される料理では、この食材の調達の良い悪しが料理の品質を決定します。

そして二つ目は入手した食材をいかに加工するか、切ったり火を入れたり味をつけたりして、食材の個性を上手く組み合わせながら料理として完成させていくかという、料理人の「調理」の腕です。

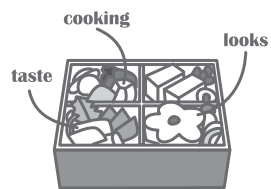


ここまでで料理はできあがりますが、さらにおいしい料理に欠かせないのが「見栄え」です。これは盛りつけであったり、お皿等の食器のデザインだったり、あるいは店の内装や店構え、あるいは周囲の立地条件も「美味しさ」に大きな影響を与える要因と言えるでしょう。

POINT!

▶おいしい料理を提供するための条件

- ① 食材が良い
- ② 調理が上手い
- ③ 盛りつけが良い



この条件は仕事にも通じます。

次に、この構図を仕事に当てはめてみます。

そうすると、下の図2に示すように、仕事と料理は同じような構図になっていることがわかります。

食材に相当するのが、情報や知識・経験です。

まずは仕事をするうえでも最低限の「材料」がなければ始まりませんから、それらを基本として身につける必要があります。

そして2番目の

調理に相当するのが、本書のメインテーマである「地頭力=考える力」です。

知識や情報を上手く組み合わせて新しい発想に結びつけるための力と言えます。

さらに見栄えや盛りつけに相当するのが、

仕事で言えば「いかに上手く見せるか」というプレゼンテーションやコミュニケーションに相当します。

まさにおいしい料理を作るための3条件は、良い仕事をするための3条件に相当すると考えられるのです。

問題は、この三つの条件の相対的な重要性の変化です。食材の入手経路がインターネットの発達等で多様化し、コンビニでいつでもどこでも入手できるようになったのと同様に、「仕事の食材」である情報や知識の入手は、ネット検索によって以前とは比較にならないほど便利かつ容易になりました。つまり、以前ならその道の専門家でしか入手できなかったような情報を、素人が瞬時に手にすることができるようになってきたのです。そうすると、どこで差がつくか。それは、

調理、つまり素材をいかに加工するかという「考える力」にかかっているのです。

さらにICT（情報通信技術）やAI(Artificial Intelligence: 人工知能)の発達がこれに拍車をかけます。単に知っているだけなら、どんなに記憶力が優れた人でもコンピュータの足元にも及びません。なにしろクラウド時代のスマートフォンは、世界中のありとあらゆる情報に瞬時にアクセスできるようになっているからです。

そうなれば、先にお話した通り、単に検索した結果をまとめるだけの仕事なら、もはや人間が必要なくなる時代が近づきつつあると言ってもよいでしょう。検索が早いだけの人の居場所はどんどんなくなっていきます。最低でも検索結果を組み合わせて自分なりの結論や方向性を導き出すことができなければ、わざわざ人間が仕事をする意味はありません。さらに言えば、「検索しても出てこない答え」や「問題そのもの」を探し出す力が人間に求められているのです。このために必要なのが、「考える」という行為なのです。

POINT!

▶求められているのは「考える」こと

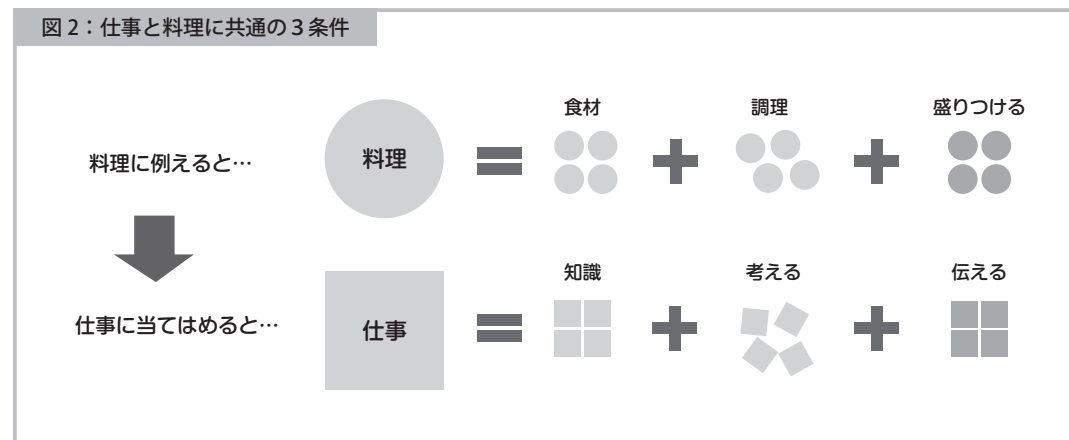
検索が早くても、生き残れない時代はすぐそこまできています。これからの時代に、人間に求められているのは「考える」ことなのです。

「情報をつなげる」=「考える」

料理でも食材を調理することには、生の食材を「切ったり」「火を入れたり」「味をつけたり」という加工をし、複数の食材を組み合わせることで新しい味を生み出すことに価値があります。同様に

「情報」や「知識・経験」という過去に蓄積されてきた材料を加工して組み合わせることや、新しい自分なりの意味合いを付け加えることで、仕事のレベルは上がっていきます。

図2：仕事と料理に共通の3条件



POINT!

▶「考える」先にあるもの「考える」ことの前には「あなたにしかできないこと」「人間にしかできないこと」があります。そこを目指して学習を進めましょう。

推理小説やドラマに出てくる名探偵や名刑事も同じようなことをやっています。誰もが見ている情報に加えて、自分なりの事実を収集して裏づけたうえで、それらの事実や情報同士に「目に見えない関連づけ」をするのが彼(女)らの「推理」、つまり「考える」ことの結果ということになります。

このように、

単に情報を集めて終わりではなく、そこに「つながりを持たせる」のが「考える」ということなのです。

そのような力を養うことが、本講座の目的です。ぜひそのような力の習得を目指して、「自分にしかできないこと」さらには「人間にしかできないこと」を少しでも仕事の中で発揮できるよう、本講座を進めていきたいと思います。



- 1 検索する前に一瞬でも立ち止まって、自分はそのデータを使って何ができるのか、考えてみましょう。

解答欄

- 2 検索結果が出た後に、「そこから何が言えるのか？」ということ仕事を目的を意識して考えてみましょう。

解答欄

図3:「考える」ことは……

